序文にかえて

8年前に大学に寄せていただいたときにもっとも嬉しかったのは，医学生さんに講義ができることでした．医学生さんに救急診療に関心をもってもらいたいと思い，教科書的なことは最低限にして，極力，自分が現場で感じたことを伝えるように努めました．いろいろな患者さんの症状を真似て現場の臨場感を出し，自分や他の医師の失敗例を示して，その事例からの教訓を話し，その日の講義の内容に関して最近出題された国家試験の問題を示し…，といろいろな工夫をしてきました．大学に寄せていただいて数年目に，卒業生の謝恩会で突然，抜き打ちで医学科のベストティーチャー賞をいただいたときの感激は今でも忘れられません．現在，3つの他の大学（医学部）と3つの看護学校にも講義に出かけていますが，彼らの目はいつも生き生きしていて，僕はいつも元気をもらっています．

私の部署の若い医師たちには「講義を上手にできるようになりなさい」とアドバイスしています．ほとんどの医師が疲弊して，日本の医療は危機に瀕しています．医師が疲弊しないためには，仲間を増やし，チームとして働けるようになる必要があると思います．年齢を重ねて体力が落ちてきた頃に「先生と一緒に働きたい」という後輩が出現するかどうかが，疲弊して現場から離れていくか，踏みとどまれるかの分かれ目だと思っています．仲間を増やすためには，臨床能力を磨くだけでなく，人格を重んじる教育姿勢，ユーモアと包容力を兼ね備えて後輩から慕われる人間性，そして楽しくてかつ役に立つ講義ができることが必要だと思い努力してきました．

この度，羊土社さんのご厚意で，私と林寛之先生が福井大学で行っている講義を本にまとめるお話をいただきました．多くの医師，看護師にとって救急室における当直の診療は嫌な仕事になっている日本で，「救急診療はできると楽しいし，わかると面白い」，ということを伝える機会をいただけたことは生涯の喜びです．医学生さんだけでなく，看護学生さん，救急外来で働く看護師さん，救急救命士さんに読んでいただくことも考慮してまとめました．読まれた方々からご意見がいただけましたら幸いです．

出版まで粘り強くお付き合いいただいた羊土社の保坂早苗さんと庄子美紀さん，中川由香さん，そして講義の録音にご協力いただいた藤井亜湖先生に感謝の意を表します．

2008年4月

寺沢秀一